

大学生および専修学校生を対象にした「死の教育」の 実践と情意面における評価

木村正治*・中川保敬*・錦井利臣*・坂下玲子*

The Discussion and Evaluation of a Death Education Curriculum for University and Special School Students

Masaharu KIMURA, Yasutaka NAKAGAWA, Toshiomi NISHIKI and Reiko SAKASHITA

(Received October 1, 1990)

The results of the Death Anxiety Scale by Templer and Death Attitudes by Hardt revealed that the attitudes of university and special school education students toward death had changed after the teaching of a death education curriculum.

The Death Anxiety Scale was administered before and after eight class sessions at Kumamoto University (8×100 minutes) and the YMCA Special School (8×90 minutes). Through the Scale, the attitudes of 49 university and 37 special school students were examined.

Students obtained Death Anxiety Scale mean scores (\pm SD) of 7.76 (\pm 2.77) and 11.08 (\pm 2.11) respectively and the pretest to posttest decrease was 0.64, 0.16 respectively (t-test, NS). The percentage of students whose attitude toward death become more positive was 44.2%, the percentage whose attitude had not changed was 39.5%, and the percentage who avoided any mention of death was 16.3%.

The aim of death education and a method of evaluation were discussed.

I. 緒 言

今日、日本でも、小・中・高校などの学校教育のなかに、「死の教育」のカリキュラムを取り入れるべきであるという主張が聞かれるようになった¹⁾。しかし、学校教育とくに義務教育での実践例の報告は未だみられないのが現状のようである。それでは、この「死の教育」の必要性が指摘される観点には、どのようなものが考えられるのであろうか。

小倉ら²⁾は、1) 死に関する経験・認識の不足、2) 死の非日常化、3) 医療上の諸問題の発生、4) Dying への対応の教育、5) 高齢化社会に伴う加齢の問題への対応を挙げている。即ち、核家族化が著しく進んだこと、および現代医療の進歩により、死が病院や施設に隔離されたことによる死の直接経験の減少が、死に対する認識すら著

しく困難にさせている情況に、この「死の教育」の必要性の最大の原因を指摘できよう。

次に、この「死の教育」の目標としては、どんなものが考えられるのであろうか。この点についても、現在まで、諸家の多数の報告がなされている²⁾³⁾⁴⁾。

エリック・ローフスは³⁾、その著書「子供たちにとって死とは何か？」の中で、実践を通した結論として、1) 死の知識を理解すること、2) 死にまつわる恐怖を減少させること、3) 死への対処の仕方を学ぶことを挙げ、「死」の理解という知的レベルの効果、恐怖の減少という情意面の効果、死への対処という認識の行動化・生活化という面から目標をとらえている。

A. デーケン⁴⁾、「死を教える」という著書の中で、死の準備教育の15の目標を掲げているが、そのなかで、サナトロジー(死学)の成果を身につけること、生と死の確固とした価値観を身につけることにつづいて、死への過度の恐怖を取り除

* 保健体育科

くことをあげ、さらに死にゆく者への対処の仕方、悲嘆教育、自殺予防教育などの行動化の面を強調している。

一方、小倉ら²⁾は、「死の教育」の目標を認知、情意、行為の3領域からまとめているが、その中で、死の基礎知識の理解とともに、死に関する価値観や健全な態度の形成をうたい、死にまつわる恐怖を取り除くことを強調している。

このように、死の教育の目標は、死学としての基礎知識を与えることによって、死に対する正しい態度を形成し、恐怖を除き、ライフサイクルの各段階における生と死をめぐる問題に適切な対処ができるようにすることを目指す教育といえよう。

そこで、熊本大学3年生およびY専修学校生を対象に行った「死の教育」の実践の評価を小倉ら²⁾のいう情意レベルの目標の達成の面から分析してみたいと考えた。このために、講義前後に、D・V・Hardt⁵⁾の死の態度尺度を用い死に対する態度の変化を調査するとともに、Templer⁶⁾のDeath Anxiety Scale (DAS)を用い、自己の死の不安・恐怖の程度の変化を検討し分析した。

両校で実践を続けている、「死の教育」のカリキュラムの概要についても併せて報告する。

II. 対象および方法

「死の教育」を受講したY専修学校生（老人ケア科1年）42名と、熊本大学3年生55名を対象とした（調査表回収者、37名、49名）。

全受講生に対して、講義前および講義後に人間の死に対する態度、自己の死に対する不安・恐怖についてを中心に、質問紙法（記名式）によって調査した。

人間の死に対する態度は、D・V・Hardtの態度尺度を参照にして、小倉ら⁷⁾が考案したスケール（A～G）を用いた。

自己の死に対する不安・恐怖の程度を測る尺度としては、生活・経験そのものの広い分野を反映する項目よりなり、正当性が十分評価されているTempler Death Anxiety Scale (DAS) テスト⁶⁾を用いた。

III. カリキュラムの概要

<1限>

人の死とは、「死」からイメージされるものは？ 瀕死の患者のエピソード二題、ビデオ

「冬の陽光、老いるとは、死とは、小学生と老人ホームの交流 300日」NHK制作、1987

<2限>

ターミナル・ケア、インフォームド・コンセント、癌告知、医者 の 義務、患者の権利、クウォリティ・オブ・ライフ、living will、尊厳死、安楽死、

<3限>

死の三徴候、心臓死、脳死、植物人間、臓器移植、手記「息子よ眠れ、おまえの臓器が6人を救った」千葉玄太、月刊朝日、4月号、1990。

<4限>

「死にゆく者の心理」、E・キューブラー・ロス、E・S・シュナイドマンの著作より、ビデオ「死刑囚の14日間」イギリスBBC制作

<5限>

aging,加齢とは、エンバーミング、読物教材「死顔の出来事」香原志勢著、『石となった死』弘文堂、1989。

ビデオ「100歳の女性、上村シゲさんの1日」自主制作（42分）

<6限>

死をめぐる法律、民法上および刑法上の問題、安楽死や尊厳死をめぐる法律。

<7限>

死と統計、人は何で死ぬか—公衆衛生学的見地より、死亡率、死因の変遷および背景因子、心疾患、脳血管疾患

<8限>

死因の第一位としての癌、癌の疫学、癌死の意味、ポックリ死願望、ホスピス、(90分×8コマ、Y専修学校のカリキュラムを中心に呈示した。)

IV. 結 果

表1は、学校別に、人間の死に対する態度を、受講前後で比較したものである。

熊本大学における受講前の態度としては、(C)まじめに考えなくてはならないことだと思う、が最も多く42.9%を占めている。次に、(E)なんとなく怖い気がする、(D)なるべく考えたくないことである、がそれぞれ24.5%、12.2%とつづいている。

受講後は、(C)がさらに増え61.2%を占めた。一方(E)や(D)は半数以下に減少し、(B)そん

表1 人間の死に対する態度 受講前後の比較

	A	B	C	D	E	F	G
熊本大学 前	1 (2.0)	1 (2.0)	21 (42.9)	6 (12.2)	12 (24.5)	4 (8.2)	4 (8.2)
熊本大学 後	3 (6.1)	4 (8.2)	30 (61.2)	3 (6.1)	5 (10.2)	2 (4.1)	2 (4.1)
Y 校 前	0	1 (2.7)	8 (21.6)	10 (27.0)	10 (27.0)	7 (18.9)	1 (2.7)
Y 校 後	1 (2.7)	0	17 (45.9)	6 (16.2)	12 (32.4)	1 (2.7)	0

- () : %
- (A) よくあることだから、あたり前の事だと思う。
 - (B) そんな気にする必要がない。
 - (C) まじめに考えなくてはならないことだと思う。
 - (D) なるべく考えたくないことである。
 - (E) なんとなく怖い気がする。
 - (F) とてもいやなことである。
 - (G) よくわからない。

なに気にする必要はない、(A)よくあることだからあたり前のことである、が増加した。

Y専修学校をみると、受講前は、(D),(E)がともに27.0%と最も高く、次に(C),(F)ととてもいやなことである、の順であった。

受講後は、(C)が45.9%と著しく増加し、次に(E),(D)の順となった。一方(F)は著しく減少した。

表2は、人間の死に対する態度について、受講前と受講後の変化を、死を肯定的にとらえる方向への移行：上方移行、死を否定的にとらえる方向への移行：下方移行および変化なしの三つに分けてみたものである。

表2 人間の死に対する態度の受講前から受講後への変化

	上方移行	変化無し	下方移行
熊本大学 n=49	22 (44.9)	19 (38.8)	8 (16.3)
Y 校 n=37	16 (43.2)	15 (40.5)	6 (16.2)

() : %

上方移行：死を肯定する方向へ移行
下方移行：死を否定する方向へ移行

熊本大学、Y専修学校とも、変化のなかったものが約40%を占めた。受講前に比べ、受講後は死を否定的にとらえる方向へ移ったものよりも、死を肯定的にとらえる方向へ移ったものが著しく高いという結果が得られた。

表3は、受講前後のDSA 得点の平均値を学校

表3 受講前後の DASの平均点

	受講前	受講後
熊本大学 n=49	7.76±2.77 *	7.12±2.54 *
Y 校 n=37	11.08±2.11 **	10.92±2.79**

mean±SD *, ** t-test NS

別にみたものである。

まず、受講前の両校の平均値をみると、熊本大学に比べ、Y専修学校は、著しく高い。自己の死に対する不安・恐怖という観点から両校の学生は、全く別の集団とみるのが妥当であると考えられる。そのため平均値に関しても別々に検討した。

両校で、受講前と受講後と比較すると、受講後に明らかな平均値の低下が認められた。しかし有意差はみられなかった。(t-test, NS)

表4は、受講前のDAS と受講後のDAS の差についてみたものである。

表4 受講後の DASの増減

	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	
受講前後の差	6	5	4	3	2	1	0	1	2	3	4	5
熊本大学	1	1	4	4	7	7	9	10	2	1	3	0
Y 校	1	2	1	1	5	5	8	4	3	5	1	1
計	2	3	5	5	12	12	17	14	5	6	4	1

(-) : 39/86 (45.3%)

(+) : 30/86 (34.9%)

受講後の得点は、受講前に比較して6点減少したのから、5点増加したのまで広い範囲にわたって増減がみられた。

両校あわせて、増減のなかったものは17/86(19.8%)、受講後に減少したものが39/86(45.3%)、増加したものが30/86(34.9%)で、減少したものがわずかに多かった。増減の程度は、-2から+1までが55/86(64.0%)と大半を占めた。

表5は、受講前に調査した自殺企図の有無別に、受講前後のDASの増減についてみたものである。

何らかの理由で、過去に自殺企図があったと答えたものは41名(47.7%)であった。受講前後におけるDAS の増減別にみると、DAS が減少し

表5 自殺企図別にみた受講前後のDASの増加

	DAS減少	変化なし	DAS増加	計
A	3	1	0	4 (4.7)
B	7	4	8	19(22.1)
C	7	1	5	13(15.1)
D	0	0	0	0
E	1	1	3	5 (5.8)
小計	17(46.2)	7 (41.2)	16(53.3)	41(47.7)
F	21(41.2)	10(58.8)	14(46.7)	45(52.3)

() : %

問 あなたの人生で死にたいと思ったときがありますか？

- A. はい、主に身体的苦痛のため
 B. はい、主にひどい感情的な混乱のため
 C. はい、主にたえがたい社会、対人関係から逃れるため
 D. はい、主に財政逼迫のため
 E. はい、その他の理由のため
 F. いいえ

たもののなかで自殺企図のあったものは46.2%、DAS の変化のみられなかったもののなかで自殺企図のあったもの41.2%、DAS が増加したもののなかで自殺企図のあったもの53.3%であった。

V. 考 察

「死の教育」の目標は、認識レベルでの死学の理解と情意レベルの死に対する正しい態度や死の不安の除去、行為レベルでの死の問題に対する実際の処し方にあることが指摘されている。

この目標論からすれば、学校教育として行う時の「死の教育」の評価は、情意面での効果を指標とした評価が最も重要となろう。なぜなら、教育の最終目標として生活化、行動化を目指したとしても、この面での評価は、技術的にも不可能な点が多いからである。

さらに、今回の場合、熊本大学で行った「死の教育」の実践とY専修学校での実践は別々に評価されるべきであると考えた。熊本大学では、このカリキュラムは、選択科目として行われ、三年生を対象に、受講生もすべての学部にわたっており、1コマの長さも100分である。一方、Y専修学校は、必須保健講義の中で取り扱ったものであり、受講生は老人ケア科の一年生で、1コマも90分である。二つの学校では以上のような違いに加えて、

Y専修学校は、農、商、工および各種高校の卒業生が多いこと、知識の理解力の面では両校にはかなりの差があることが、各時間の終了後に毎回提出させたレポートより推察された。二校で行った講義は、内容的にはほぼ同じものを扱うにしても、資料や教材に対するアプローチの仕方は、著しく異なっており、内容の質・量という点では、かなりの差があったとみるべきであろう。

人間の死に対する態度の分布では、両校にはかなりの違いがみられたが、態度の変化でみる限り、死を肯定する方向へ移ったものおよび態度に変化のなかったものが、圧倒的多数を占めるというほぼ同様の結果が得られた。

「死の教育」を人の死に対する態度の面から評価を試みた諸家の報告をみると、まず、Knott や Prull ら⁸⁾は、6ヶ月の「死の教育」の実践のあと、受講した大学生について、自分の死についてしばしば考えるようになったという変化は認められたが、死に対する態度には有意な変化はみられなかったとしている。

一方、Hardt⁹⁾やMcDonald ら¹⁰⁾は、Thuston Equal-Appearing Interval Attitude Scale による死に対する態度評価で、死を容認する方への変化が認められたと述べており、本研究の結果はこれに準じるものであった。

次に、自己の死の不安・恐怖の程度を表す指標とされるTempler のDeath Anxiety Scale (DAS)についてみると、熊本大学でもY専修学校でも、受講前に比べ受講後は、平均点が減少した。つまり、平均点でみる限り受講後は、自己の死に対する不安・恐怖が軽減したことが指摘される(有意差なし)。情意レベルの目標の一つである死にまつわる過度の不安や恐怖をとり除くという観点からすると、今回の「死の教育」の実践は有効であったと評価されるであろう。

この点についても諸家の報告がみられるが、P. Murray¹¹⁾は、看護婦に対して、90分×6コマの「死の教育」を行った時のDASの平均値の変化をみているが、受講前、受講直後、受講後4週目のDASはそれぞれ、6.70±2.34、6.36±2.04、5.63±1.97であった。受講前に比較し、受講後4週間目のDASは有意に低かったとしている(t-test,P<0.05)。

さらに、Linda A.¹²⁾は、将来小学校の教師となる学生に対し、90分×2コマの短い「死の教育」

を行った時のDASの変化についてみているが、受講前、受講後2週目、受講後10週目のDASは、それぞれ9.05±3.05, 8.30±3.00, 8.10±2.83で、明らかに自己の死に対する不安・恐怖が低くなったことを報告している。この場合も受講後10週目のDASの低下が著しい。

今回は、「死の教育」の実践の直後にDASを調査したものと比較したが、講義終了後ある期間において調査を試みるのも重要ではないかと考えられる。

一方、Margaret W. Linn¹⁹らは、療育院(nursing home)のスタッフに対し、120分×3コマの「死の教育」を行って評価を試みているが、講義を行わなかった群(コントロール群)に比較して、自己の死に対する不安・恐怖は高まったとし、これに対し、他人の死や死にゆくことについての恐怖は低くなったというデータを示し、死についての十分な知識を与えることによって、死についての感情に強く気づかせることは、死に対する恐怖をも喚起するのではないかと結論づけている。

このように、諸家の報告をみても、「死の教育」をうけたあとで、DASが確実に低下すると結論づけるのは早計であるように考えられる。DASが低下したとの報告も平均点でのことであって、個々人の動きとしては把握されていないのである。多分、調査が無記名で行われたために一人一人のことが考察できなかつたのであろう。

今回の受講前後のDASの増減をみてみると、-6~+5までの振幅でDASは変化しており、個々人にとっては、決してすべてDASが低下してはいないことが指摘される。もっといえば、DASが減少したものの割合(45.3%)と、増加したものの割合(34.9%)の間には著しい差はみられないのである。とくに、「死の教育」を受講後に死の不安・恐怖が高まる人が多数いることも十分念頭においておく必要がある。

もちろん、受講前後のDASの増減は、-2~+2の間で変化したものが60名(69.8%)の圧倒的多数を占めており、これは、DASの質問項目15個中の2コの変動内ということで、自己の死の不安・恐怖に与える影響はそれほど強くなかつたと結論づけるのが妥当といえるかもしれない。

自殺企図についての質問は、E・S・シュナイドマンが、1970年米国で行ったもの¹⁰と同じものを使用した。E・S・シュナイドマンによると、

全体の60%が死を願ったとしており、さらにこの中で14%は、致死性の高い試みを実行したと報告している。今回のデータでは、自殺企図者は、47.7%で、米国のデータに比較し低いものであった。

自殺企図者とDASの増減との関係では、DASが増加したもの(死の不安・恐怖が高くなったもの)に、他の群に比較し、自殺企図者がわずかに多いという結果が示された(53.3%対41.2%, 46.2%)。この自殺企図という問題に対しては、どのくらい頻繁に自殺企図があつたか、死の可能性のある試みをどの程度実行したことがあるか、などの詳細な調査をおこなって検討する必要があると考えられた。

VI 結 語

熊本大学で行った100分×8コマ、およびY専修学校で行った90分×8コマの「死の教育」の評価を、D・V・Hardtの死に対する態度尺度と、TemplerのDeath Anxiety Scaleを用い、受講前後の記名式調査によって実施した。

熊本大学学生(49名)の受講前後の態度尺度の変化でみると、死を肯定する方向へ移行したものの44.9%、変化のなかつたもの38.8%、死を否定する方向へ移行したものの16.3%であった。Y専修学校生(37名)では、それぞれ43.2%、40.5%、16.2%であった。ともに、死を肯定する方向への移行と変化のなかつたもので圧倒的多数を占めた。

TemplerのDASの変化についてみると、熊本大学生では、講義前7.76±2.77、講義後7.12±2.54、Y専修学校生ではそれぞれ、11.08±2.11、10.92±2.79であった。講義前に較べ講義後は、DASの平均値は低下したが有意差はみられなかつた。さらに、個々人の変化でみると、DASが減少したものの45.3%、DASが増加したものの34.9%で、著しい差はみられなかつた。

自殺企図別に、受講前後のDASの増減についても検討したが、両者には有意の差はみられなかつた。

文 献

- 1) 谷 莊吉：死の教育の現状とその課題，学校保健研究 Vol 28 (6)257-262 1986.
- 2) 小倉 学，中村邦子：死の教育の目標と内容について 第一報 死の教育の必要性和目標について 学校保健研究 Vol 31 (11)531-549 1989.

- 3) エリック・ローフス編 麻生九美訳：「子供たちにとって死とは？」 晶文社 1984.
- 4) アルフォンス・デーケン：死への準備教育の意義－生涯教育として捉える アルフォンス・デーケン編集「死を教える」メヂカルフレンド社 1986.
- 5) Dale V. Hardt : Development of An Investigatory Instrument to Measure Attitudes Toward Death, Journal of School Health Vol 45 (2)96-99 1975.
- 6) Donald L.Templer : The Construction and Validation of a Death Anxiety Scale, The Journal of General Psychology Vol 30 (4)165-177 1970.
- 7) 小倉 学, 森永浩一郎：児童生徒の死別経験と死に対する態度について－「死の教育」のための基礎的調査の結果, 学校保健研究 Vol 29 (6)281-288 1987.
- 8) Knott J.E. and Prull R.W. : Death Education : Accountable to Whom ? For What ? Omega 7 177-181 1976.
- 9) Dale V. Hardt : A Measurement of the Improvement of Attitude Toward Death, Journal of School Health Vol 45 (2)269-270 1976.
- 10) McDonald R.T. : The Effect of Death Education on Specific Attitudes Toward Death in College Students, Death Education Vol 5 59-65 1981.
- 11) Patricia Murray : Death Education and its Effect on the Death Anxiety of Nurses, Psychological Report Vol 35 1250 1974.
- 12) Linda A. Molnar-Stickels : Effect of a Brief Instructional Unit in Death Education on the Death Attitudes of Prospective Elementary School Teachers, Journal of School Health Vol 55 (6)234-236 1985.
- 13) Margaret W.Linn, Bernard S.Linn and Shayna Stein : Impact on Nursing Home Staff of Training About Death and Dying J.A.M.A Vol 250 (17)2332-2335 1983.
- 14) E.S.シュナイドマン著 白井徳満他訳「死にゆく時」誠信書房 1980.